



〈研究〉企業と経営 : 経営學方法論の一の試み(1)

北川, 宗藏

(Citation)

国民経済雑誌, 51(6):977-989

(Issue Date)

1931-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00054386>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00054386>



研 究

企 業 と 經 營 (其一)

經營學方法論の一の試み

北 川 宗 藏

一

生産の社會的總和の構成部分たる個々の生産經濟(1)は、社會の全生産力の發展とともに、その量的大いさをたえず擴大する。しかしてこの量的擴大につれて、生産經濟の内容もまたたえず變質する。

(1) 生産經濟には種々の部門があるけれども、われわれのこゝにいふ「生産經濟」とは特に工業的生産を行ふ單位經濟のことである。レーマンの「産業的經營經濟」(die industrielle Betriebswirtschaft) (M. R. Lehmann, Allgemeine Betriebswirtschaftslehre, 1928, S. 50.) にもたゞ「レーマンによれば、經營經濟は財務經濟 (Finanzwirtschaft)——企業 (Unternehmung)——と、生産經濟 (Produktionswirtschaft)——經營 (Betrieb)——との二つの側面から成立つてゐる (a. a. O. S. 36—37.)。それ故にレーマンのいはゆる生産經濟は、たとひ名稱は同一であつても、われわれのこゝに

いふ生産經濟とはその内容を全く異にするものである。われ／＼はレーマンの經營經濟、經營、企業の把握したがつてまたそれらの用語法に賛成することができない。われ／＼の見解によれば、これらの諸範疇は生産經濟の生成進化の過程において繼起的に出現し、したがつてある一定の段階において出現した範疇がその段階のヨリ高きそれへの上向とともにヨリ高次の範疇のなかへみづからを没し去るとき運動においてあるところのものである。これらのことは本論文の敘述の進行とともに明かとなるであらう。さらにまた馬場敬治氏の「産業體」なる概念（『産業經營理論』、第二版、昭和四年、一三八頁以下）も、われ／＼の生産經濟なる概念に相當するとみることができる。しかしわれ／＼は、氏が産業體を企業體と經營體との綜合と解せられる點については、レーマンの所説に對してと同様、若干の異論なきを得ない（後段參照）。

生産經濟は決して靜穩なる固定性——非發展體——としてわれ／＼のまへに向ひ立つのではない。それは、何よりもまづ第一に、單純なるものから複雑なるものへの動性（Beweglichkeit）としてわれ／＼のまへにあらはれる。すなはちわれ／＼にとつて生産經濟は、運動の原理をみづからにはらみ、それ故にこそまた自己のうちより運動生成を産出するところの活動體たるものである。かゝる動性の發展過程全體は、まづ最初は、その單純なる端緒的形態のうちに、卷かれた形あるひは潜在的な形で包含されてゐる。われ／＼の本論文における研究の進行は、かゝる端緒としての生産經濟のうちに潜在的に與へられてゐる内容をその生成の道行にしたがつて展開させるであらう。かくしてわれ／＼は單純かつ抽象的な範疇から複雑かつ具體的な範疇へ上昇しつゝ、生産經濟の實在的推移の全運行を認識に描きとるであらう。

さて「企業」および「經營」兩概念は、從來國民經濟學者の手によつてもある程度に取扱はれてきたものでは

あるが、經營經濟學ことにドイツ經營經濟學の擡頭とともに、斯學の學問的對象性の規定に關聯して深刻なる問題となつたものである（増地庸治郎氏『經營及び企業の概念』、『商學研究』、第七卷、第二號、所載、三四七頁、參照）。しからばはたして經營經濟學の高價なる努力によつて、これら兩概念は何ほどの明瞭さにもたらされ得たであらうか。われ／＼は不幸にしてこれを肯定するの勇氣をもつことができない。いな、われ／＼はかへつて混亂のうへに混亂を積み重ねるの結果をそこに見出すのみである。かゝる混亂の堆積は、われ／＼をしていはしむれば、畢竟もろ／＼の經營學者が混亂を解明せんとしてかへつてその混亂をよび起した認識方法と全く同一の認識方法のうへにたつことに沿由するものである。いたづらなる反覆はたゞます／＼昏迷の深淵を深めるより以上の何ものでもあり得ない。

認識における混亂の根本的解明はたゞ全く新しき方法論的視光のもとにおいてのみなされ得る。

われ／＼は企業および經營兩概念を、從來の仕方とは異つて、生産經濟の生成的運動のなかで解明しようとする。企業と經營は一般に經營經濟學においてしかるごとく、かたくなな靜止體と考へなされた生産經濟の悟性的分析にもとづく二個の抽象的契機たるものではない。それらは、生成的過程において内面的なる聯關を有すべき、それ故にこそ相異なる段階に配せらるべき、生産經濟自身の二つの具體的形態たるものである。企業は生産經濟の自己開被の運動につれて自己のヨリ具體的な形相として出現しきたる經營に自己の座席をゆづる。高級の形態たる經營は下級の形態たる企業のうちに潜在的に與へられてゐるものゝ實現にほかならぬ。かゝる「發生的解

明の方法」こそは實に企業および經營兩概念をその具體的な歴史性(Geschichtlichkeit)において解釋するの可能性を提供するものであつて、これら兩概念の久しき紛糾のなやみに一道の光明をなげるものゝごとく思はれる。われ／＼は本論文においては、すでに貨幣の出現せる交換社會における生産經濟の發展過程に研究を限りたいと思ふ。それ故にわれ／＼の研究においては、その發端をなすものさへもすでにある程度に發達した交換社會において商品生産を行ふところの生産經濟である。

二

生産經濟がきはめて小規模であつて微弱なる生産力を有するにすぎない間は、それは「一人經營」(Alleinbetrieb, ne-man business)(2)なる形態(3)をとる。一人經營はたゞ生産經濟の一定の量に、すなはちきはめて小さき量に相應する形態にすぎない。

(2) ニマン・マン・ツイ Alleinbetrieb にもた・マン・ツイ Einzelbetrieb もしくは einfacher Betrieb なる語をもつて呼んでゐる(H. Nicklich, Die Betriebswirtschaft. II. Teil, 1930, S. 173—174)。しかし einfacher Betrieb なる語は、氏の Grundfragen für die Betriebswirtschaft, 1928, S. 15f. にあつては、複合經營を形成する部分經營の意味に用ひられてゐることに注意せねばならない。

(3) 一人經營の形態とは、それにおける人的要素が一人であるといふ量的規定のみをいふのではない。もちろんこの量的大いさも注目すべきことではあるが、こゝではむしろ一人が如何なる内容においてあるかの質的規定に考察の重點が存す

るのである。

われ／＼がこゝに一人經營といふとき、われ／＼はそれをすでにわれ／＼の學問的方法において語つてゐるとに、何よりもまづ注目せねばならない。

普通用ひられてゐる「一人經營」なる範疇は、生産經濟そのものゝ具象的な一形態——その生成的始原——をさすものではなくして、生産經濟の單なる一側面として解せられたる、それ故にこそその單なる思惟契機にすぎざる、經營の一の形態をさすものである。かゝる範疇は、他の視點からこれを見るならば、畢竟、一人經營内における生産手段が、その一人經營者(4)自身の、もしくは彼以外の何人かの、所有に屬してゐるものであらうと、あるひはまた手工業時代、初期資本主義時代もしくは高度資本主義時代のうちに存するものであらうと、とにかくこれら一切の本質を異にする一人經營の諸形態を單なる雜多として同一平面上に羅列し、これらの間に有する本質的差別性を非本質的偶然性として捨象し去り、たゞそれらにおける共通的一般者のみを選びきたつて構成された貧しき觀念にすぎぬ(5)。かゝる「一人經營」のごときは實に生々たる具體的現實性から灰色の冥界へ遊離されたあはき影繪にほかならぬ。

(4) シンバルトはこれに相當するものを、もちろん彼自身の意味における一人經營についてあるが、*Alleinarbeiter* と呼んでゐる (W. Sombart, *Der moderne Kapitalismus*, I. Bd. 1. Aufl. 1902, S. 28f.)。

(5) Sombart, a. a. O. S. 28f. 増地庸治郎氏『經營經濟學』(改造社版、『經濟學全集』第三十六卷、昭和四年)七〇頁以下、向井鹿松氏『經營經濟學總論』、『商學全集』第二卷、昭和四年)六六頁、同、『分業組織としての經營概念』、『三田學

會雜誌』第二十二卷、第二號、所載、二八頁以下にあらはれた一人經營、Nickisch, Die Betriebswirtschaft. II. Teil. 1930. S. 173f. における einfacher Betrieb といふ Einzelbetrieb なる概念の例である。

しかしながらわれ／＼にとつては、かゝる諸種の一人經營は形式論理的羅列として同一平面上にかき集められ得るものではない。生産經濟が一人經營の形態から、その全内容を露呈する生成的前進において、新しき形相をとりつゝ擴大し行くにしたがひ、この生成にとり殘された一人經營は、その發展せる高級の諸形相を自己の他者として有するものとなり、それ故にこそ發端としての一人經營とは全くその内容を異にする形相へ退化するにいたる。高度資本主義の社會機構内に生きながらへる一人經營は、中世手工業時代における一人經營の襍質物たるものである。かくのごとく時間的に限界づけられた諸種の形相を擔ふもの／＼の一人經營を一律に取扱ふことは、もの／＼具體性に鋭く着眼するわれ／＼の方法からすれば、斷じて許容さるべきことではない。かゝる一人經營の諸形相を全體としてしかも何らの捨象をも加へずその具體性のまゝ統一的に理解する道は、個性を生かしつゝしかもよく全體を把握し得る唯一の學的方法たる「生成の論理」をほかにしてはあり得ない。われ／＼は經營經濟學において普通なされるごとき時間を空間に還元するの暴舉をあくまでもつゝしまねばならぬ。

われ／＼にとつて目下の問題たる一人經營は退化せる一人經營ではなくして、生産經濟の生成的始原にたつ萌芽的具體者としてのそれである。それ故にそれはもちろん所有の側面をもふくめての意味に理解されねばならぬ(6)。われ／＼はかゝる一人經營を、現實の歴史的事象としては、中世の手工業者のあるものについて見出すこ

とができる(7)。フェルデンタークルツェフスキーは一人經營をこの時代のなかに入れ、その當時『諸都市に在りては小經營——主として一人經營——が優勢であつた』と述べてゐる(Felden-Zakrzewski, Betriebswirtschaft, ihre Geschichte, Handwörterbuch der Betriebswirtschaft. Herausgegeben von H. Nicklisch. I. Bd. 1926. Sp. 1148—1149)。

(6) 馬場氏は一人經營を、この意味に用ひてなれる場合がある。『企業發達の初期に於ては、企業は、所謂 one-man business にして、凡ての職能は、單一の個人により兼ね行はれて居り、企業主は彼の企業を統制すると共に亦、其の企業の危険をも自ら之を負擔した。即ち、彼は、企業家の二職能を單獨にて行ひしものである。』(『産業經營理論』三〇八一—三〇九頁) しかしながらわれは、氏が一人經營を企業とみてなれることについては、同意することができない。のちに述べるごとく企業は、生産經濟が自己の所有する貨幣をもつて他人の勞働力を勞働商品市場より購買したりこれ土臺となしてその貨幣が資本に轉化するにいたるとき、はじめて出現したる生産經濟の一の現象形態にはかならぬ(H. Nicklisch, Wirtschaftliche Betriebslehre. 6. Aufl. 1922. S. 40. 參照)。われは一人經營のうちに、まだそれら諸要素の何ものも見出すことができぬ。一人經營はいまだ企業のさうやかな胚種にすぎぬ。

(7) われは、この研究は工業諸形態の實證的な歴史を主題としてゐるのではない。しかしそれだからといつてまたいたづらに空虚なる論理のなかけめぐるものでもない。いひ得べくんばわれは、この研究態度は historisch-logisch なるそれである。

こゝに一人經營なる名稱を用ひるからといつて、われは、がすでにこの段階において「經營」なる範疇を有するものごとく誤解してはならない。のちに述べるごとく、この段階は自己露呈の生成的運動を経過してはじめ

て企業としてあらはれ、さらにヨリ豊富なる規定へ經のぼることによつてはじめて經營の次元に到達するものである。それ故にそれはいまだ企業および經營の萌芽にすぎぬ。この段階にあつてはわれ／＼はいまだ經營なる範疇はおろか企業なる範疇をさへも有しない。

われ／＼はこれまで一人經營なる概念をわれ／＼の方法の立場から普通の意味よりはヨリ限定的な意味に使用してきた。しかしながらそれ故にこそこの概念を不適當と考へるならば、もちろん何らか他の概念をもつてそれにおき換へても妨げない。たとへばシェルドンの one-man industry なる言葉 (O. Sheldon, The Philosophy of Management, 1924, p. 65) をもつてするもよからう。またデードが土地、資本 (生産手段) の所有および勞働が同一人格に統合してゐるものを *le producteur autonome* と呼んでゐる(8)に模して、*l'industrie autonome* と呼ぶも差支ないであらう。

(8) Il est possible qu'une même personne fournisse à la fois les trois facteurs : la main-d'oeuvre en travaillant elle-même, la terre et le capital en étant propriétaire..... On l'appelle *le producteur autonome*. (Ch. Gide, *Principes d'Economie Politique*, 16. éd. 1916, p. 152) デードは、このことをだち農業についてのみ例示してゐるにすぎないが、われ／＼はこれをわれ／＼の意味の一人經營——工業上の生産を行ふところの——にも適用できると考へるものである。

經營經濟學は、生産經濟の高度に發展せる段階において、こゝにいたつてはじめて出現してきた經營現象の學的把握として成立する學問であるから、この一人經營の段階においては、いまだ經營經濟學は存し得ず、したがつてまた一人經營が斯學の研究對象たり得ざることと明白である。馬場氏は「生産を營める經濟單位の規模の増大

は、産業革命以來最も顯著なる傾向の一つであり、從つて、斯の如き one-man business は、從來、産業經營の研究に於て殆んど對象とされざるものと云つてよい。』と主張され（『經營學方法論』昭和六年、二八九頁）、また向井氏も『かかる經營（一人經營）は吾人（經營經濟學）の研究對象とはならない』といつてをられる（『經營經濟學總論』、六六頁）。

一人經營にあつては、生産の勞働にあたるものは同時に現實に作用する生産手段の所有者である。すなはち生産（生産勞働および生産手段）と所有とは一人經營者なる同一人格において合體してゐるのである。

しかしながらこれらの規定は、嚴密に吟味するならば、すこぶる不完全であり、またある意味においては誤謬でさへもある。生産と所有とは、のちに述べるごとく、一人經營がつぎのヨリ高き象面へ移行するとき漸く分裂の第一步を印し、さらにその後の自己示顯の前進運動につれてますます分裂の事象的明度を高め行くものである。したがつてわれ／＼がたがひに他者として對立する内容を自己の意味として保有する「生産」「所有」兩概念をもつていたるのは、一人經營の次元よりはるかにのちのことに屬する。それ故にまへの一人經營の規定にあつて、われ／＼はいまだこの段階においては有し得ざる二個の概念を使用したこととなる。このことの不完全な誤謬たるはいふまでもないことである。

そこでわれ／＼はまへの規定をつぎのとき消極的規定に書き改めることによつて、はじめて眞なる把握に到達することができる。すなはち、一人經營は、その内容がのちに生産と所有との兩項的對立として現實的に分裂

するにいたるものではあるが、いまだ、それらの分裂せざる無差別的事態にあるところの生産經濟である、と。かくのごとき規定仕方をそれが消極的であることの理由をもつて無意味なるものと思ひなすならば、それはあまりにも輕卒にすぎる。われ／＼にとつてはかゝる規定仕方こそ、かへつてわれ／＼の方法の心髓に徹する重大なる意味を有するものであつて、畢竟一人經營をこれが發展せる形態たるつぎの段階に、すなはち未來への先取りの豫料に關聯せしめて、それ故にこそ動性そのまゝに、規定することにほかならぬ(9)。しかしながらこの限りにおいては、われ／＼は一人經營のうちに、生成的規定性における無——純粹なる虛無とは異なるところの——を見得るにすぎぬ。

(9) われ／＼はゾンバルトが手工業者について語つてゐるつぎの文章を、こゝにおいてことさらに意味深き内容をもつて讀まざるを得ない。『もしわれ／＼が何よりも第一にわれ／＼の言表を消極的に總括して、財の生産および財の販賣のために必要な條件——人的性質のものであらうと、物的性質のものであらうと——が何も缺けてならず、それ故にその人格のうちに工業的生産者のすべての屬性が、換言すれば生産上の能力が、いまだ何らの分化もなしに、包括されてゐることとき工業的労働者を、「手工業者」と名づけるならば、われ／＼は、その最も内的な性質にしたがつて「手工業者」たるものを、最も明確にいひあらはし得るやうに、私には思はれる。』(a. a. O. S. 79.)

生産經濟はまへに述べたごとく自己の充實に向つて進展し行く動性である。しかして一人經營は、かゝる動性の一切の豊富なる規定的現象の基礎によつてゐる生成の始點をなすものである。實に一人經營こそは生産經濟の生成的運動における全内容がそこから發展すべき、それ故にそれ自體はいまだ單純なる、創造的始原

(schöpferischer Anfang)たるものである(10)。一人經營は生産經濟の自己發展の種子にほかならぬ。生産と所有とはこの種子のうちにいまだ發端的一體性として眠りにおちてゐる。しかしながらこの種子はやがてその生長の過程において所有と生産との對立的二分化としてめざめ、これを中樞としてきはめて豊富なる規定をもつてわれ／＼のまへにたちあらはれるであらう(11)。

(10) 『それは發展の理論のおよび經驗的出發點を形成する。』(Feiden-Zakrevski, a. a. O. Sp. 1168.)

(11) シェルドンは生産上の諸職能およびこれの遂行に必要な人間の諸性能の分析を試みるにあつていふ『各性能は性能の職能的區別が一個人に集中されてゐる“one-man” industryの假定的狀態からの分化とみなされ得る。』(op. cit. p. 65.)

われ／＼はこれまで一人經營を、未來の新しき段階への關係においてのみ、それ故に消極的にのみ、取扱つてきた。しかしそれだからといつて一人經營は、それ自體として、何らの規定をも帶同せざる純粹なるものであるといふことにはもちろんならない。それはそれ自體としてはすでに現實的な存在たる以上は、すでに十分に規定されてゐるものであつて、決して空虚なる純粹性たるものではない。

一人經營はすでに貨幣の出現せるある程度に發達した交換社會内において商品生産を行ふところの單位經濟である(D. H. Robertson, The Control of Industry, 1923, p. 9. 參照)。それ故に一人經營の全活動はそのうちにすでに流通行程しがつて貨幣への關係をふくむにしても、それがその全活動を反覆遂行する目的はたゞ一人經營者の生活維持にほかならない。ゾンバルトはいふ『手工業者の努力が主として向けられてゐるものになかんづくつ

ぎの二つの點があるやうに私には思はれる。すなはち身分相應のくらしと獨立とである。……彼の工業勞働は彼のために、彼の生活にとつての物質的基礎を、彼の「生活資料」を、調達せねばならぬ。』(Ca. O. S. 86.)

一人經營にあつては所有と生産とがいまだ無差別的一體性として直接的に統合されてゐるが故に、その一人經營者の『勞働收穫の總體はすこしの減額をも蒙らずしてその手に歸する』(Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft. 6. Aufl. 1908. S. 154.)ものである。それ故にまた、一人經營の勞働生産力がたとひ微弱ながらもある限度をこえて發達し、その一勞働日内の生産物全體が市場から交換的に得きたる他財の分量が、生産手段の費消部分および一日の生活に必要な生活資料の分量を超過するにいたると、そこに若干の餘剰を生じ、この餘剰は貨幣價值として一人經營者の掌中に蓄積されることとなる。もちろんこの蓄積され行く貨幣價值は一人經營者自身の勞働に根源するものたることいふまでもない。しかしながらかゝる蓄積貨幣もいまだ依然として自己の生活保障たる意義を有するにとどまる(12)。それ故に、たとひ一人經營の生産活動がこの貨幣蓄積を目的となされることがあつても、一人經營が生活維持を目的とする生産形態たることの本質には依然として變りないのである。

(21) Zur Bestreitung des Aufwandes (der Ausgaben) dienen die Einnahmen (das Einkommen). Der Einnahmeüberschuss (Ersparnis) ist kein Ertrag oder Gewinn; er dient zur Vermögensbildung oder zur Deckung künftiger Ausgabenüberschüsse. (F. Leitner, Wirtschaftslehre der Unternehmung. 5. Aufl. 1926. S. 3.)

この貨幣蓄積の分量が一定の限界内にとどまれる間は、それは決して右に述べたとき一人經營の本質を破壊

するものではない。しかしながらそれがその限界をこえて大となれば、それはつひに生産經濟をして一人經營の外殼をやぶつて他の新しき形態に推移せざるを得ざるにいたらしめる前進の動因となるものである。われ／＼はこゝに、一人經營の内奥にひそめるその生成的運動の衝動力を發見せざるを得ない。(未完)